

研究

母子におけるくすぐり遊びとくすぐったさの発達

根ヶ山光一¹⁾, 山口 創²⁾

〔論文要旨〕

典型的な母子の身体接触の遊びである「くすぐり遊び」とそれに伴う「くすぐったさ」について、(1)日英家庭における母子の自然観察(0・1, 6・7, 12・13か月齢時の横断研究)と、(2)日本の家庭における実験(4・5~12か月齢の縦断研究)から検討した。自然観察の結果、強いくすぐったさを伴う遊びとしてのくすぐりは6・7か月齢以降顕著にみられ、12・13か月齢においては、じらしたり誘ったりという要素を加え、いっそう遊びの様相を強めていた。実験的研究においては、1歳までに3回家庭を訪問して、子どもの身体の16部位をくすぐった。その結果、身体部位に応じた多様なくすぐりが発現し、7か月以降身体部位とくすぐり行動間の対応性が明確化した。そしてそれらの結果のもつ母子関係の発達の変化上の意味が考察された。

Key words: くすぐり遊び, 乳児, 母子関係, くすぐったさ, 身体接触

I. 問 題

母子関係において子どもの身体は、母親との関係を形成する重要な媒体である。そのことは、妊娠や哺乳といった哺乳類としての基本的な親子関係のあり方が母子の身体を基盤として成り立っていることや、また、抱き・運搬・身体清潔などの重要な母子相互作用がいずれも子どもの身体を対象にしたものである、といった例を挙げれば十分であろう。これらの関わりにはすべて身体接触が関与している。

身体接触は、他の感覚モダリティと異なる独自のコミュニケーションチャンネルである。根ヶ山¹⁾は身体接触がもつ独特の属性について、「く私」性「情動性」「刹那性」「双方向性」「状態性」「全身性」という6つの側面から指摘した。これらの属性が示唆するように、身体接触は個体間に情動の共有をもたらし契機となる。言い換えると、身体接触はそれによって両者が相対的な体験を得ることに非常に有

効なチャンネルだということになる。近年この身体接触がもつ対人関係上の重要な役割があらためて見直されつつある^{2)~6)}。

身体と心が重複したところに「身」という概念を導入したのは市川⁷⁾であるが、母親と子どもの身体的遊びには、両者の身の重なり合いとして解釈すべき部分が多分にある。そして、こういった身体接触を通じた双方向性・同時性・間主観性(intersubjectivity, 二者の間で相互の主観が通じ合うこと)をふまえる母子関係観は、母親の応答性を重視するアタッチメントの立場とは大きく異なっている。

身体接触はしばしば「スキンシップ」として一括されるが、それは決して母親から子どもへの一方的な関わりかけではなく、またそこには実はさまざま異なる行動型や機能が含まれる⁸⁾⁹⁾。くすぐり遊びは、そのような身体接触を介した母子の豊かな関わり合いの一つである。

くすぐり遊びは、母子が相互の身体を用いて行う遊びの典型的なものであり、そこには独特

Development of Mother-infant Tickling Play and Infant's Ticklishness

[1654]

Koichi NEGAYAMA, Hajime YAMAGUCHI

受付 04. 9. 6

1) 早稲田大学(研究職) 2) 聖徳大学(研究職)

採用 05. 2. 9

別刷請求先: 根ヶ山光一 早稲田大学人間科学部 〒359-1192 埼玉県所沢市三ヶ島2-579-15

Tel/Fax: 04-2947-6739

の身体的関係が見られる。また、くすぐり遊びは、「くすぐったさ」という特殊な感覚を喚起させ、それが互いの楽しさを強める。ここに、情動の共有という身体接触の特性が強く反映される。そのくすぐったさは、「自分」でなく「他者」からの刺激でひき起こされる。そうであるならば、母子間でのくすぐり遊びにおける発達的变化を調べることは、乳児における「他者性」の認識の発達過程の一端を明らかにすることにもつながりうる。

本研究は、そのような母子関係の発達に関する独自の切り口としてのくすぐりとくすぐったさを手がかりとして、その行動に見られる身体性とその発達的变化の分析をめざすものである。具体的には、日英の家庭での自然な観察場面における母子のやりとり（研究1）と、日本の家庭での実験的研究（研究2）を報告する。

II. 研究1：日英家庭での観察

1. 目 的

本研究は、日英の母子関係に関する比較研究の一環であり、母子の日常生活の様子をそれぞれの家庭において4時間連続でビデオ撮影し、自然なやりとりを分析することを目的としたものである。ここではとくに「くすぐり遊び」に焦点化して、それが日英の家庭においていつ頃からどういう状況で、どういった行動として見られるようになるかを分析した。

2. 方 法

i. 観察対象

日本の近畿圏と英国エディンバラにおいて、健診や医療の場、母親のネットワーク等を利用して、原則として0～1か月齢、6～7か月齢、12～13か月齢（以下ではそれぞれを第1期、第2期、第3期とする）の乳児をもつ母親にアプローチして研究の内容を十分説明し、同意書に

より同意の得られた母子を観察対象とした。実際には多少月齢幅を越える事例も含まれ、その結果0～2、6～8、12～13か月齢の男女児とその母親合計78組がそれぞれの家庭において観察された（表1）。

ii. 手続き

上記対象児のいる家庭を原則として午前11時頃に訪問し、研究者がハンディービデオカメラをもって、約4時間にわたり連続撮影を行った。まず日常の母子行動を自然観察するという研究内容を研究者が母親に十分説明し、母親から同意書に署名・捺印を得た後、家庭およびその周辺における乳児とその母親の様子が、子どもの覚醒・睡眠にかかわらず連続して撮影された。観察の主たる対象は乳児とし、できるだけ母子の表情と子どもの全身が映像に収まるように努めた。母子が離れた場合は、可能な限り母親もその画面に収録されるようにカメラを移動させて子どもを撮影した。その他、その場で乳児の行動に影響がありそうな人やモノ、出来事などなるべく映像に収めるように努力した。観察を遂行するにあたって、対象となる人たちの行動に観察者の存在が影響を与えることができるだけ少なくなるように細心の注意を払った。ただし、母親が撮影を望まない場面は申し出てもらい、その間は撮影を中断した。

iii. 結果および考察

さまざまな行動が母子間で観察されたが、ここではくすぐりに焦点化して検討した。くすぐり行動は、明確に遊びの形で見られる場合と、遊び以外の文脈で見られる場合があった。日本と英国でくすぐりのエピソードを比較したところ、その向けられる身体部位・用いられる行動・子どもの反応のいずれについても、両者の傾向は類似していた。そこで以下では、日英の区別をつけずに知見の要点を指摘する。

母親から子どもへのくすぐり行動は、第1期には余り見られず、第2期以降比較的多発するようになった（図1）。またその行動型・対象部位も、第1期と第2期以降とで大きく様相を異にしていた。第1期にみられたくすぐりは、覚醒レベルの低下した子どもを刺激し覚醒を促

表1 観察された母子ペア数

	英国	日本
第1期（0、1か月齢）	12	14
第2期（6、7か月齢）	12	13
第3期（12、13か月齢）	12	15

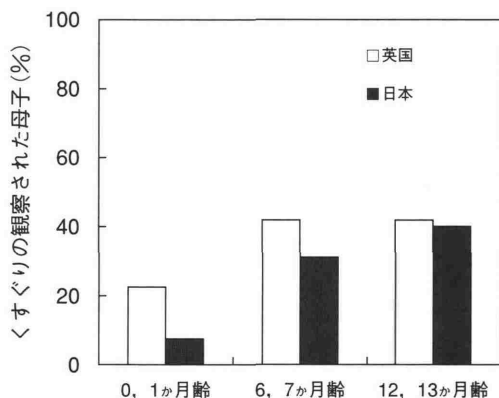


図1 日英におけるくすぐり様行動の生じた母子ペアの割合

すという文脈で生じたものであった。その行動は、手足の先端や脛部など子どもの四肢を対象とし、母親の指の先端もしくは背側をそっと当てて繰り返し微弱にストロークするというパターンをとっていた。

これと異なって、第2期以降におけるくすぐりは子どもの覚醒時に多発するようになった。それは腋下や腹、そけい部など主に子どもの体幹部に向けられ、立てた指を強く食い込ませるような行動型を特徴としていたとともに、「コチョココチョ」などの短い反復の音声を伴っていた。またこの時期のくすぐりはしばしば、母親が手を振り上げてから素早く子どもに攻めかかるようにしてなされ、軽微な「攻撃」成分を帯びた行動として発現することが多かった。同時に子どもにも第2期以降、回避と喜びという異なる2種類の情動が複合された強い「くすぐったがり」反応が見られるようになった。

もう一つ特記されることは、第3期において、母親がくすぐるふりをして途中で手を止めてみたり、子どもが逃げるそぶりをしながらくすぐられるのを誘ってみたり、といったようなくすぐりの遅延・はぐらかし・挑発などのやりとりが盛んに見られるようになったことである。それと同時に、四肢の末端から始まって体幹部で終了するという定型的な「筋書き」性がくすぐりに見られるようになり、かつそれに「歌」が伴われてその文脈性を一層際立たせるようになったことも、この時期の大きな特徴であった。

実験結果が示すように、くすぐり遊びは生後1, 2か月目ではきわめて貧弱であったが、半年を経た時期には多発していた。また多発するようになってからのくすぐり行動が、初期のそれとは明らかに異なる行動パターンで、四肢ではなく体躯を対象としていたことは前述の通りである。

生後半年以降のくすぐりは、母親の表情に微笑が浮かび、快活な音声を伴い、いかにも楽しそうに子どもを刺激するなど、明らかに遊びとして発現していた。しかも前述のようにそこには、一旦腕を子どもから遠ざけ、勢いをつけて子どもの身体に突き刺すごとくに指を立てるという、抑制された軽微な攻撃成分が混入されていた。それは、くすぐりが子どもに与えるインパクトを増強させる効果を生んでいるように思われた。子どもは典型的にはそれに対して、身をよじって楽しそうに笑って応じた。

くすぐりに対して身をよじるのは、不快が子どもに生じていたことを示唆する。くすぐりで遊びかけられることは、その不快が母親から楽しい表情とともに提供されるという、子どもにとっては一種両価的な事態である。そこに攻撃成分があえて付加されているのであり、それによって一層強められる不快が快と混合され、それが結果として強い「愉悦」を生んでいると考えられる。

1歳になると、くすぐりを誇張したり遅延化したりして、その遊びとしての効果を強める方略も母親に顕著に導入されるようになっていた。さらに1歳を過ぎると、母親からのくすぐりを誘いかける行動が子どもに見られるようになった。「歌遊び」のスタイルをとることで、子どもに行動の予期を可能にする筋書き性が顕著になるとともに、子どもが相手の意図を読み、操作するという要素が一層強く含まれるようになったものと推察できる。

Ⅲ. 研究2：家庭における実験的研究

1. 問題

研究1で指摘したように、くすぐり遊びは母子間で身体を用いてなされる遊びとしてきわめて基本的かつ普遍的なものであった。それは「くすぐったさ」の感覚を基盤としているが、その

感覚は本来「自己」でなく「他者」，とりわけ親しい他者が自分の身体の特定の部位を刺激することによって生じるものである^{10)~13)}。本研究では，くすぐりが母子間に遊びとして成立しうるか否か，また子どもが母親との間で身体認知的な自他分化がどのように生じるかを，日本の家庭において実験の手法により縦断的に明らかにすることをめざす。

2. 方 法

i. 実験参加者

埼玉県T市で開催される乳児健診の場を利用して，4か月齢未満の乳児のいる家庭に研究協力を打診し，十分な説明の結果，同意書により協力に同意した12家庭を，子どもが4～5か月齢（第1期），7か月齢（第2期），12か月齢（第3期）の3回にわたって研究者が反復的に訪問し，以下の実験を行った。

ii. 手続き

子どもの16の身体部位（頭頂・額・首・肩・上腕外側・上腕内側・胸・腋下・脇腹・掌・手の甲・脚外側・脚内側・脛・ふくらはぎ・足の裏）を一通りランダムな順序で母親にそれぞれ約5秒間ずつくすぐってもらい，それに対する乳児の反応を持参したハンディービデオカメラで撮影した。くすぐる部位の順番は被験児ごとに異なっていた。

その実験を上記3時期に同一手続きで行って縦断的な発達をみた（子どもの健康や機嫌などの事情により，各発達段階とも部分的にデータの欠落がある）。分析上とくに注目したのは，くすぐりとはどのような行動型なのか，くすぐ

ったがり反応がみられる身体部位はどこか，それらにどのような発達の変化があるか，といった側面であった。

なお，行動の分類・判定については，まず2名がすべてのデータを独立に分析し，次にその結果を逐一照合して不一致の部分がなくなるまで合議するというかたちで，できるだけ正確な分類を心がけた。

iii. 結果および考察

教示では全身を同じ行動でくすぐるようにと母親に告げたにもかかわらず，実際に発現した行動は多様であり，それらは指の接触部分，指の開閉様曲げ伸ばしの有無，接触の強度によりいくつかのタイプに分けることができた（表2）。

これらのパターンが観察された母親の人数を，それぞれの時期ごとに，身体部位別に示したのが表3である。表から明らかなように，パターン1（1A，1B，1C）がくすぐりの基本型であり，その傾向は月齢が進むにつれて強まっている。言い換えると，初期のくすぐりにはさまざまなパターンが混在して発現し，安定性が低かった。

さらに興味深いことに，身体部位とくすぐりのパターンにはある程度の対応関係があった。一般的な傾向としては，月齢が進むにつれて身体部位とくすぐりパターンの間に対応関係が明確化することが認められた。ここで部位とパターンの対応としてひときわ顕著なのは，1Aという指を押しつけ食い込ませるような強い基本型が，腋下と脇腹という体幹内部の柔らかな部分にほぼ特異的に向けられていたことであ

表2 くすぐり行動の種類

行 動 型	押しつける	中程度の強さで触れる	軽く触れる
指を立てて曲げ伸ばしし，指先で触れる	1 A	1 B	1 C
指を曲げ伸ばしせず立てて，指先で触れる	2 A	2 B	2 C
指を寝かせて曲げ伸ばしせず，指先の腹でなでる	3 A	3 B	3 C
指を寝かせて曲げ伸ばししつつ，指先の腹でなでる		4	
指を寝かせて，その指を押しつけ動かす		5	
指を寝かせて指全体（大部分）の腹でなでる		6	
指を曲げ伸ばしつつ揉む		7	
その他		8	

表3 身体部位に各くすぐりパターンを発現させた母親の人数

	N	4, 5 か月齢												
		1 A	1 B	1 C	2 A	2 B	2 C	3 A	3 B	3 C	4	5	6	7 8
頭頂	12		4	5		2	2		1				2	
額	12		2	9			3		2	1			1	
首	12	3	5			1			1		1	3		
肩	12	2	4	1	1							3		3
上腕外側	12		10	4		1			1		2		1	1
上腕内側	11	1	7	6					1				1	
胸	12	2	6	5		2								
腋下	12	8	4											
脇腹	12	6	6	1		3		1			1		1	1
掌	12	1	8	5										
手の甲	12		3	8		1			1	1				
脚外側	12	1	3	8			1		1		1		2	
脚内側	12		4	6	1				2	1				
すね	12		4	7			1		2	1				1
ふくらはぎ	12		5	5							1			4 1
足の裏	12		6	6		1								

	N	7 か月齢												
		1 A	1 B	1 C	2 A	2 B	2 C	3 A	3 B	3 C	4	5	6	7 8
頭頂	12		3	8			2						1	
額	11		1	10			2			1			1	
首	11		6	2						1		5		
肩	12	1	3	1	1	1								6
上腕外側	12	1	5	8										
上腕内側	19	1	5	2			1							
胸	12	3	8	2										
腋下	12	8	5											
脇腹	12	7	5											
掌	12		8	4										
手の甲	11			11										
脚外側	11	1	2	8						1				2
脚内側	11	2	8	3			1							
すね	11		1	9			2							
ふくらはぎ	12		4	7								1		1
足の裏	12		2	11			1							

	N	12 か月齢												
		1 A	1 B	1 C	2 A	2 B	2 C	3 A	3 B	3 C	4	5	6	7 8
頭頂	11		3	8			1							
額	11			11										
首	11		5			1			1		1	1		3
肩	11	1	2						1					8
上腕外側	11		6	5										
上腕内側	11	2	7	2										
胸	11	2	7	1							1			
腋下	11	9	3											
脇腹	11	8	2											1
掌	11		5	6										
手の甲	11		3	8										
脚外側	11	1	5	5										
脚内側	11	1	9	1										
すね	11		1	10										
ふくらはぎ	11		7	3										1
足の裏	11		3	8										

注：網掛けしたセルは、過半数の母親がそこに集中していたことを示す

た。それと、パターン7の揉むような行動がとくに肩に収斂していったことも指摘できる。その他、頭頂・額・上腕外側・手の甲・脚外側・すねといった体幹部以外の堅く平らもしくは直線的な表面をもった部位に、1Cという微弱な基本型が多く向けられていたことも特筆されるであろう。

一方、くすぐり刺激に対する子どもの反応は、表情・音声もしくは四肢・体幹の動きをもとに、「回避」「遊び」「くすぐったがり」に分類された。回避とはしかめ面・身体よじりなどの不快や遠ざかり反応を、また遊びとは微笑や脚のばたつかせなどの快や高揚反応をもとに判定された。くすぐったがりとは笑いつつ身体をよじったり手足を遠ざけるなど、基本的に回避的要素と遊びの要素が併合された、強い情動性を伴う反応であった。そこで、くすぐったがりを明確なものと微弱なものに2分し、それに遊び・回避・反応なしを加えて、くすぐりに対する乳児の反応傾向を表4に示した。

16部位について分析した結果、強い弱いかを一括したくすぐったがり反応は、第1期においては首・肩・上腕内側・胸・腋下・脚内側・足裏において、第2期では首以外のそのそれぞれに加えて脇腹・手の甲・すね・ふくらはぎにおいて、また第3期では新たに額・上腕外側・掌・脚外側においてそれぞれみられ、くすぐったさを示す乳児の数とそれを惹起する身体部位の種類は、ともに月齢が進むにつれて増加した。第1期ではくすぐったがり反応、とくに高い情動喚起を示す強いくすぐったがりは乏しかった。その時期には、むしろただ微笑む、手足を引っ込めるなどの単純な遊びや回避がよく見られた。なお、3時期のいずれにおいてもくすぐったがり反応がまったく発現しなかったのは頭頂のみであった。

くすぐったがる部位は身体とくに胴体の内側部が中心であり、成人がくすぐったがる部位とおおむね一致していた。なかでも強いくすぐったがり反応が見られたのは、12か月齢時点における腋下であった。一方、足の裏は強いくすぐったがりよりも、この時期ではどちらかといえば回避を誘発する部位であり、その点は成人と異なっていた。

強いくすぐったがり反応に関して、身体部位のすべてに欠落なくくすぐりを受けた乳児（第1期12名、第2期9名、第3期11名）だけを選び出して、強いくすぐったがり反応の有無の身体部位差についてCochranのQ検定を行ったところ、第1期では有意でないが第2期以降ではきわめて有意であった（第1, 2, 3期はそれぞれ $Q=7.66$, $df=15$, ns ; $Q=39.28$, $df=15$, $p>0.001$; $Q=48.70$, $df=15$, $p>0.001$ ）。強いくすぐったがりは生後半年未満では全身どこでもほとんど発現しないが、すでに7か月齢時点から、よく見られる身体部位とそうでない身体部位間に明らかな勾配をもっていた。強いくすぐったがり反応を示した子どもの比率を「反応なし」「25%未満」「50%未満」「50%以上」に分けて示したのが図2であるが、7か月齢以降体幹部において強いくすぐったがりが顕著に見られたことがわかる。

一方、回避と遊び反応については、第1期の回避においてのみ有意な部位差が見られたが（ $Q=32.06$, $df=15$, $p<0.01$ ）、その他はいずれの時期においても有意な部位差は指摘できなかった。第1期の回避は、とくに四肢の先端部へのくすぐりで多く見られていた。

特定のくすぐり行動に、それが効果を持つ特異的な身体部位が対応しており、それが生後非常に早い段階から見られたという事実は、子どもの身体機能の分化が相当早い段階から存在することを意味し、母親はその分化に対応した適切なくすぐり反応を発現させていたといえる。

また、同一のくすぐり行動を用いるという課題下で母親の実際にくすぐり行動が、部分的にせよ子どもの身体部位に対応して異なっていたということは、母子間の遊びにおいて子どもの身体が、母親からの特定の行為の機会としての「アフォーダンス」^{註1)}的機能を有することを示唆するものとして興味深い。

母親は、異なる身体部位に対して異なる行動型でくすぐりかけるばかりでなく、くすぐったがってもいいはずの部位へのくすぐりがそれをひきおこさないとき、探索的に自らのくすぐり行動を変化させてもいた。そしてやがて、子ど

註1) affordance: J. Gibsonの造語。環境の中に存在する知覚者にとっての行為の機会のこと。

表4 各身体部位へのくすぐりに対する乳児の反応

	N	4, 5か月齢				
		強いくすぐったがり	弱いくすぐったがり	遊び	回避	なし
頭頂	12	0	0	4	1	8
額	12	0	0	5	0	7
首	12	0	1	5	1	5
肩	12	0	1	3	0	8
上腕外側	12	0	0	5	0	7
上腕内側	11	0	2	4	2	4
胸	12	1	1	5	0	5
脇下	12	2	3	2	0	5
脇腹	12	0	0	3	3	6
掌	12	0	0	6	3	4
手の甲	12	0	0	5	3	5
脚外側	12	0	0	2	2	8
脚内側	12	0	1	1	1	9
すね	12	0	0	1	2	9
ふくらはぎ	12	0	0	4	1	7
足の裏	12	0	3	2	6	1

	N	7か月齢				
		強いくすぐったがり	弱いくすぐったがり	遊び	回避	なし
頭頂	12	0	0	4	2	6
額	11	0	0	1	4	5
首	11	0	0	3	3	5
肩	12	1	0	5	3	4
上腕外側	12	0	0	3	1	8
上腕内側	19	0	4	2	2	1
胸	12	1	3	4	1	3
脇下	12	4	4	1	2	1
脇腹	12	5	1	3	2	1
掌	12	0	0	6	2	4
手の甲	11	0	2	3	1	5
脚外側	11	0	0	3	1	7
脚内側	11	1	0	4	0	6
すね	11	0	2	2	1	6
ふくらはぎ	12	0	1	3	1	8
足の裏	12	1	1	1	4	5

	N	12か月齢				
		強いくすぐったがり	弱いくすぐったがり	遊び	回避	なし
頭頂	11	0	0	1	4	6
額	11	0	1	0	5	5
首	11	3	3	2	0	3
肩	11	2	2	1	4	2
上腕外側	11	0	4	5	1	1
上腕内側	11	4	2	0	4	1
胸	11	3	3	0	2	3
脇下	11	8	1	0	0	2
脇腹	11	3	3	0	2	3
掌	11	2	2	1	2	4
手の甲	11	0	2	1	2	6
脚外側	11	1	0	1	2	7
脚内側	11	3	2	1	1	4
すね	11	0	0	1	2	8
ふくらはぎ	11	0	2	1	2	6
足の裏	11	3	2	1	5	0

注：網掛けしたセルは、過半数の子どもがそこに集中していたことを示す

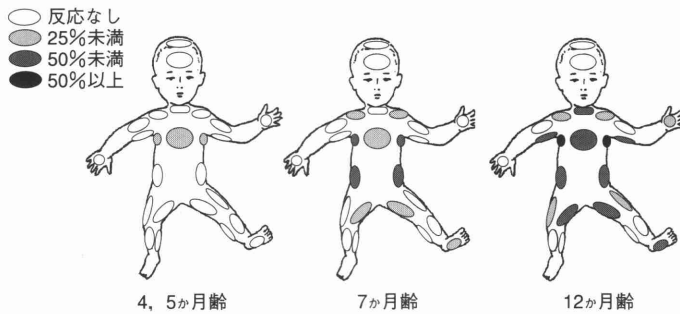


図2 強くくすぐったがり反応の生じた割合の発達的変化

もの発達とともにそのパターンが収束し安定したのである。母親は、おそらく自らがもつくすぐったさの身体感覚をふまえ、くすぐったがり反応の有無を予期しつつ子どもの身体をくすぐり、それに対する子どもの反応に導かれながら行為を探索的に調整し、子どもの身体との間に徐々に安定した特定の関係性を成立させていったのだろう。

しかもそれが楽しい情動を伴って行われ、母子の双方が相対的な感覚に浸されつつ行うのがくすぐり遊びなのであり、そのような遊びを誘発する乳児の身体はその意味で「資源」^{註2)}と呼ぶにふさわしい。親は、その資源に惹かれて乳児に行動を向け、その接触の見返りとして何がしかの充足感を得ている。おそらくこのことは乳児からみたときに、楽しい情動を自分にもたらし親の身体について資源性を認識するということでもあるだろう。親子の身体は相互に資源性をもって存在しているといえることができる。接触というコミュニケーションは、実はそのような身体の資源性を同時双方向的に充足させてくれる行為であるともいえよう。このようなコミュニケーションを通じて、親子は共振の世界を形作っているのであり、身体とはそのための有力な媒体なのである。

7か月齢の乳児が強くくすぐったがりを示すようになることは、この時期の子どもが母親を他者として理解し、その母親の楽しさや意図を読みとりながら体験を共有することによってく

すぐり遊びが成立している、ということを示唆する。くすぐりは、子どもの身体に母親の行動がおのずと誘導され、母親の行動によって子どものくすぐったさという情緒が発生し、その反応が母親をも共感的に快に引き込みその行動を強める、というようにして持続されるものであろう。このようにくすぐり遊びとは、基本的に母子相互にくすぐったさと楽しさを共有する間主観的・共振的なやり取りと見ることができる。そこで両者の身体は、どちらが相手を一方的に支配するというでもない、身体接触独特の相互性に浸されるのである。

IV. 総合論議

これまでみてきたようにくすぐり遊びは、母子の両身体の呼応によって実現されるものであり、そのような独特の共振の交歓を支えているのが、「くすぐったさ」という独自の感覚である。同じくすぐるという課題に対し、身体部位によってくすぐり行動が変化したことからも推察されるように、くすぐる側もくすぐりながら自分の身体感覚をそこに重ねて、相手と情緒を共有しているようなところがある。くすぐられる側とくすぐる側が相互に感応し合い、両者の楽しさが倍加するところに、くすぐりが遊びとして成立する契機があるように思われる。くすぐられることによって子どもが感じるくすぐったさと、くすぐる側の母親が間主観的に感じるくすぐったさが疎通し、二人が間身体的に共振する、すなわち2者の身体が並行的に同じ状態を共有するという意味において、くすぐったさは本質的に、身体が取りもつ社会的情緒であると考えべきである。

註2) 資源とは実体としての身体が他者にとって正もしくは負に価値づけられているということであり、他者はその資源に契機づけられて行動する。

くすぐったさは身体接触が喚起する快と不快の混合状態を基盤に成立する情緒であり、それは一般に他者のくすぐりによって生じるものであるが、くすぐったがり反応が発達に応じて増加するとともに強まり、またその身体部位による発現の勾配も増大したことは、乳児の生後1年間、とくに前半の半年間における身体の機能分化と身体を介した自他認識の成熟過程を示唆するものである。生後半年未満の段階ではそれが未熟なため、くすぐりが母子間の遊びとなり得ないという可能性が指摘できるであろう。家庭での日常観察において指摘できた生後数か月とそれ以降のくすぐり行動の質的・量的差違は、そのような背景をもっていたと考えられる。

ある程度の不快をひきおこすくすぐりが母親という親しい他者からもたらされるときに、母親のくすぐりによって子どもに生じる快と不快のコンフリクトは、「くすぐったさ」という感情として統合され、遊びを成立させるのであろう。この時期の母親によるくすぐり遊びには攻撃・侵襲成分が含まれるが、それは子どもの不快・恐れを強めてくすぐりの両価性を高め、結果としてくすぐったさを増強させる効果がある。母親はそのような子どものくすぐったがり反応によって子どもと間主観的に疎通し、強い喜びと一体感を両者にもたす。

くすぐったさの感覚は、自分で自分の体をくすぐってもさほど強烈に沸き上がってこない。その感覚の生起には「他者」性が必要なのである。このようにくすぐり遊びとそれによるくすぐったさは、母・子相互の身体接触をふまえた情緒の共有を大きな特徴としており、そこには母子間の間主観性と自他の分化を理解する重要な手がかりが存在するといえる。そのような適度の反発性の存在こそが「愉悦」を生み、母子の強烈な結合を育んでいるのである。それが単なる他者でなく、「親しい他者」としての母親によってもたらされるところにより深い意味がある。このような母子における関係のあり方は、「安全基地」としての母親とそれを求める子ども、というようなアタッチメント理論が想定する安定志向的図式とは大きく異なるものである。

Blakemore¹⁰⁾¹¹⁾はある装置を用いて、自ら

のくすぐりがそのままもう一方の掌に伝わる場合と若干の時間差や軌跡のズレをとまって伝わる場合、あるいはまったく自分の意思と関係なく刺激が機械的に与えられる場合を比較し、くすぐり刺激が自分の行動の反映である度合いが強いほど感じられるくすぐったさは小さいことを確認し、さらにfMRIによってこのような効果は小脳の働きによることを示唆している。

Harris & Christenfeld¹⁴⁾は、目隠し・耳栓をした状態の被験者に、実は同一人物によるくすぐりを「人」あるいは「機械」によるくすぐりと思い込ませ、そのくすぐったさを比較して、感じられるくすぐったさに差がないことを明らかにした。そして、くすぐったさは社会的体験であるよりも反射的体験と考えるべきであり、くすぐりによる笑いがエソロジーでいうところの「固定的動作パターン」である可能性を示唆している。筆者がフランス Toulouse 大学の則松宏子氏と比較研究を行ったところ、日仏間でくすぐりの向けられる身体部位は酷似していた(未発表)。このことも身体がリリーサーとして機能しているという可能性を示唆する。

しかしながら、機械といえども他者性を帯びた刺激源であることは否定できない事実である。「固定的動作パターン」といいながらもその行動型の記述がないという問題のため、乳児においてどんな他者のどんな行動も愉悦を含めた同等のくすぐったさを生ぜしめることができるのか、それともそれは親しい他者としての母親に特徴的に見られる反応なのかは、この報告のみからは結論づけられない。本結果が示すように発達初期にはくすぐったがり反応が少ないことや発達後期にそれを巡るかけひきが相手との間に成立したことを考えれば、おそらく単なる他者性では十分でなく、それはある程度の親しさを前提とする反応なのだろうと推察される。

このようにくすぐったがり反応を切り口にして、乳児の社会性の発達を、身体を介して吟味することができるということはそれ自体興味深いことであるが、同時に、母親がくすぐる際に、乳児のくすぐったがり反応の成否によって、くすぐり遊びの仕方を母親が教え導かれる状況が見られることもある。母親がくすぐる時に、自

分の身体感覚を下敷きにして、子どもの身体部位に応じた特定のくすぐり方を選び、またそのくすぐりによって子どもに多様な身体反応が生じ、それに呼応して母親がくすぐり方を変容させる。これは見事な母子間の身体的コミュニケーションという他ない。母親と子どもの間で結ばれる身体遊びには、大なり小なりこのように身体の共振関係が含まれている。こういったやり取りによって育まれる2者間の水平的な関係は、初期の母子関係を理解する上で非常に重要であると考えられる。それが子どもの身体をめぐるアフォーダンスとして、子どもの身体に導かれつつ母子間に成立することの重要性を再評価する必要があるだろう。

今後は、くすぐり遊びを定常の遊び場面で自然観察するとともに、母親のくすぐり行動と子どものくすぐったがり反応の対応を分析的に吟味し、くすぐり遊びの発達の変化、およびそこでの子どもの自他認識の発達の要因の考察を行う必要がある。

引用文献

- 1) 根ヶ山光一 発達行動学の視座：〈個〉の自立発達の人間科学的探究。東京：金子書房 2002.
- 2) Field, T. (Ed.) Touch in early development. Mahwah : Lawrence Erlbaum, 1995.
- 3) Field, T. Touch. Cambridge : MIT Press, 2001.
- 4) 井村真澄 マッサージ・タッチケア：その潮流と効果 助産婦雑誌, 2000 ; 54 : 29-33.
- 5) 達野百合子 ベビーマッサージの実際 助産婦雑誌, 2000 ; 54 : 34-38.
- 6) 山口 創 愛撫・人の心に触れる力。日本放送出版協会 2003.
- 7) 市川 浩 〈身〉の構造。東京：講談社 1993.
- 8) Peállez-Nogueras, M., Field, T., Gewirtz, J.L., Cigales, M., & Gonzalez, A. The effects of systematic stroking versus tickling and poking on infant behavior. Journal of Applied Developmental Psychology, 1997 ; 18 : 169-178.
- 9) Tronick, E.Z. Touch in mother-infant interaction. In : T. Field (Ed.) Touch in early development. Mahwah : Laurence Erlbaum, 1995.
- 10) Blakemore, S-J., Wolpert, D.M., & Frith, C.D. Central cancellation of self-produced tickle sensation. Nature Neuroscience, 1988 ; 1 : 635-640.
- 11) Blakemore, S., Wolpert, D., & Frith, C. Why can't you tickle yourself? NeuroReport, 2000 ; 11 : 11-16.
- 12) Claxon, G. Why can't we tickle ourselves? Perceptual and Motor Skills, 1975 ; 41 : 335-338.
- 13) Weiswkrantz, L., Elliott, J., & Darlington, C. Preliminary observations on tickling oneself. Nature, 1971 ; 230 : 598-599.
- 14) Harris, C.R. & Christenfeld, N. Can a machine tickle? Psychonomic Bulletin & Review, 1999 ; 6 : 504-510.

〔Summary〕

Tickling and ticklishness were studied in a naturalistic cross-sectional observation and a longitudinal experiment. In the observational study, 76 Japanese and Scottish mothers and their infants of 0/1, 6/7, and 12/13 months old were observed in their home. "Tickling" was directed to the extremities to arouse a drowsy infant, not playfully at 0/1 months. From 6/7 months, it was directed to the torso with finger penetration, which caused a strong ticklishness to infants. The play became more sophisticated at 12/13 months by an introduction of teasing and singing. In the second study, 12 mother-infant dyads were repeatedly observed in the home at 4/5, 7, and 12 months of age under the same procedure, i.e., mother's tickling toward the infant's 16 body areas for 5 seconds each. Tickling had several different fingering patterns, and the difference was corresponded to different body areas of infants. Strong ticklishness was not evident at the youngest age, and became apparent thereafter particularly in tickling toward armpit and flank. The meaning of the results was discussed from the viewpoint of development in mother-infant relationship.

〔Key words〕

Tickling play, Infant, Mother-infant relationship, Ticklishness, Bodily touch